

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

2024年 6月 17日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 藤 洋作 様

所属部局・研究科 大学院医学研究科リウマチ性疾患先進医療学講座

職名・学年 特定講師

氏名 大西 輝

助成の種類	令和6年度 ・ 国際研究集会発表助成			
研究集会名	2024年欧州リウマチ学会年次集会			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他(
発表題目	Comparative effectiveness of subcutaneous sarilumab, subcutaneous tocilizumab, and intravenous tocilizumab in patients with rheumatoid arthritis: the ANSWER cohort study			
開催場所	オーストリア・ウィーン・Messe Wien Congress Center			
渡航期間	2024年 6月 9日 ～ 2024年 6月 16日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円		
	使用した助成金額	350,000円		
	返納すべき助成金額	0円		
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費目	金額(円)	
		航空運賃	226,500	
		宿泊費	155,674	
		滞在費(日当)	90,400	
		学会参加費	0	
その他		89,175		
	以上に助成金を充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)この度は上記国際学会参加のために助成して頂きありがとうございます。我々のコホートの紹介、国外の研究者とのディスカッションを行えたことは、今後研究を進める上で大変参考になりました。また、今後の共同研究に繋がるネットワーキングもできました。今後も多くの学生・研究者が海外で交流する機会を得られることを期待します。			

成果の概要 / 大西 輝

ヨーロッパリウマチ学会学術集会 (European Congress of Rheumatology 2024) は、リウマチ学に関する最新の研究成果や治療法についての情報交換を目的とした国際会議で、最新の研究発表や教育セッションが行われ、リウマチ学の分野において最新の知識を得るだけでなく、グローバルなネットワークを広げる重要な機会の場となっております。今回、私は、京都大学教育研究振興財団助成事業様より国際研究集会発表助成を受け、オーストリア・ウィーンにて開催されたヨーロッパリウマチ学会学術集会 2024 にて、研究成果 (Comparative effectiveness of subcutaneous sarilumab, subcutaneous tocilizumab, and intravenous tocilizumab in patients with rheumatoid arthritis: the ANSWER cohort study) を発表してきましたので、以下にご報告申し上げます。

発表に先立って APLAR/ACR/EULAR exchange program に参加し、アメリカ・アジア・ヨーロッパの研究者とウィーン医科大学の講師陣とディスカッションを行うとともに、自分のプロジェクトを紹介し、海外の研究者とのネットワーキングを実施することができました。ウィーン医科大学でのディスカッションでは、各国の研究者が持つ異なる視点やアプローチに触れ、異なるバックグラウンドを持つ研究者とディスカッションすることで、多様な視点や考え方に触れ、研究の幅を広げることができました。また、自身のプロジェクトを紹介する際には、プレゼンテーションスキルや研究内容の魅力を実感的に伝える力が試されるとともに、専門家からの具体的なアドバイスや建設的な批判を受け、研究の質を向上させるためのヒントが得られました。さらに、帰国後すぐに数人の研究者から連絡がきて、今後の研究プロジェクトや共同研究につながる可能性を感じております。海外の研究者と共同で研究を進めることで、グローバルな視点から問題に取り組むことができ、より広範な研究成果が期待されます。また、各国の研究機関や研究者が持つリソースやデータを共有することで、研究の効率や質を向上させ、共同研究の成果を論文として発表し、リウマチ学の分野に貢献するよう努めていきたいと感じております。

また、学会中には関節リウマチ (RA) の治療において、インターロイキン 6 (IL-6) 阻害薬としてサリルマブ (SAR) とトシリズマブ (TCZ) の比較検討の結果を発表して

まいりました。背景として SAR と TCZ は、投与量、経路、IL-6 受容体 (IL-6R) に対する親和性、IL-6/STAT3 シグナル伝達の阻害などが異なるが、IL-6R 阻害薬の直接比較は行われていませんでした。そこで多施設共同コホート研究において、RA 患者における SAR 皮下注、TCZ 皮下注、および TCZ 静注の有効性を比較検討し、その結果を報告してまいりました。その際にも会場での質問や、共同研究の話に繋がる研究者との交流もできました。よりグローバルな視点や意見を持った参加者と議論する機会が得られ、今後の論文化の際に非常に有用であると感じました。本学術集会はヨーロッパ各国からの参加者だけでなく、アメリカ、環太平洋地域などからも多数の参加者があり、今回の国際学会を通して改めて世界に発信できるような学術研究を今後も継続していきたいと感じ、研究活動の刺激になりモチベーションを高めることも出来ました。また、海外の研究者との交流を通じて、異なる文化や研究環境についての理解が深まりました。これは、グローバルな視点での研究活動において非常に重要と思われる、文化的な視野も広げることができました。

本国際学会に参加するにあたり、多大なご助成をいただきました京都大学教育研究振興財団様に心より感謝申し上げます。この助成のおかげで、世界各国のリウマチ学の専門家と直接交流し、貴重な知見を得ることができました。国際学会の参加費用は、研究者にとって大きな負担となりますが、京都大学教育研究振興財団様の助成により、参加費や渡航費、滞在費などの経済的負担が軽減され、心置きなく学会活動に集中することができました。また、助成を受けて学会に参加することで、自身の研究成果を国際的な舞台で発表し、広く認知していただく機会を得ました。これは、自分の研究に対するフィードバックを得るとともに、今後の研究活動をさらに発展させる大きな一歩となりました。さらに、学会では、多くの著名な研究者や専門家との交流が可能でした。この交流を通じて、最新の研究動向を知るだけでなく、今後の共同研究やプロジェクトの可能性を探ることができました。京都大学教育研究振興財団様のご助成は、単に経済的な支援にとどまらず、私の研究活動に対する大きな励ましとなりました。財団の支援がなければ、このような貴重な経験を積むことは難しかったと思います。心からの感謝を申し上げるとともに、今後もいただいたご支援を糧に、リウマチ学の発展に貢献できるよう精進してまいります。